HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2013年度北海道礼文町浜中２遺跡発掘概要報告書
Author(s)	加藤, 博文; 岩波, 連
Issue Date	2014-04-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56663
Type	report
File Information	ha2_2013Preliminaryreport-2.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Preliminary Archaeological Field Report at Hamanka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

２０１３年度
北海道礼文町
浜中２遺跡
発掘概要報告書

Preliminary Archaeological Field Report at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

Designed by YUKI Koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター

Center for Ainu & Indigenous Studies,

Hokkaido University

２０１３年度
北海道礼文町
浜中２遺跡
発掘概要報告書

Preliminary Archaeological Field Report at Hamanaka 2 site,
Rebun Island, Hokkaido, JAPAN

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Center for Ainu & Indigenous Studies,
Hokkaido University

例　　言

1．本概報は、2013 年7月 23 日から8月 20 日にかけて国際共同研究プロジェクト「バイカル・北海道考古学プロジェクト」の一環として行った北海道礼文郡礼文町浜中2遺跡の発掘調査の概報報告である。

2．発掘調査は、北海道大学とアルバータ大学（カナダ）が組織主体となり、日本側の調査手続きは、北海道大学が担当した。調査組織は以下のとおりである．

発掘主体者　常本照樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター長）
発掘担当者　加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授）
調査員　　A. Weber（アルバータ大学人類学部教授）
調査員　　H. McKenzie（グラント・マックエワン大学人類学部）
調査員　　友田哲弘（旭川市教育委員会）
調査員　　佐藤孝雄（慶応義塾大学文学部）
調査補助員　深瀬均（北海道大学大学院医学研究科）
調査補助員　岡田真弓（北海道大学アイヌ・先住民研究センター博士研究員）
調査補助員　岩波連（北海道大学大学院理学院博士課程）
調査補助員　佐藤丈寛（琉球大学大学院医学研究科日本学術振興会特別研究員）

遺 跡 名　　浜中2遺跡（北海道教育委員会登載番号：H-08-019）
所 在 地　　北海道礼文郡礼文町大字船泊村ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発掘面積　　28 ㎡

3．2013 年度の調査の実施にあたっては、科学研究費補助金基盤研究 A「アイヌ民族文化形成過程に関する総合的研究」（研究代表者:加藤博文、2012-2015 年度）および、日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「北方圏における人類生態史総合研究拠点」（プロジェクトコーディネータ：加藤博文、2013-2017 年度）の助成を受けた。

4．本概報の執筆は、本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。
執筆分担は以下の通りである。

例　言　　加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授）
第1章　　同上
第2章　　同上
第3章　　同上
第4章　　岩波連（北海道大学大学院理学院博士課程）
第5章　　岩波連・加藤博文
まとめ　　加藤博文

なお、出土遺物のうち、墓から出土した人骨資料については琉球大学大学院医学研究科人体解剖学講座において石田肇教授を中心に整理を行い、出土動物遺存体は慶応義塾大学文学部民族考古学研究室において佐藤孝雄教授を中心に整理作業をおこなっている。さらに出土動物遺存体のうちカラフトブタとイヌについては、北海道大学大学院理学研究院多様性生物学分野において増田隆一准教授を中心に DNA 分析を進めている。

5. 本調査の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。

6. 発掘調査に際しては、北海道アイヌ協会事務局、および同協会理事豊岡征則氏、笹村昭善氏の両氏には、調査前の祖先供養および土地の神への祭礼の儀式であるカムイノミの実施に際して、多大なご助力をたまわった。また調査地点地主である中谷栄氏には、調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。
調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、岩城修教育長、藤澤隆史社会教育主事をはじめ礼文町および礼文町教育委員会の支援と協力を得た。調査メンバーを代表して感謝の意を表する次第である。

目　　次

第1章　調査の実施体制について …… 1
　第1節　バイカル・北海道考古学プロジェクト …… 1
　第2節　調査フィールドとしての礼文島 …… 1
　第3節　研究拠点形成事業との関連 …… 2
第2章　浜中２遺跡の調査と概要 …… 3
　第1節　調査にいたる経緯 …… 3
　第２節　礼文島の環境 …… 3
　第３節　遺跡の立地 …… 3
　第４節　調査組織と参加者 …… 5
第３章　調査区について …… 6
　第1節　調査区の設定 …… 6
　第２節　調査区の層序 …… 6
第４章　検出された遺構 …… 11
　第1節　近世アイヌ期の遺構 …… 11
　第2節　オホーツク文化期の遺構 …… 14
　第3節　続縄文文化期の遺構 …… 17
第5章　主な出土遺物 …… 20
　第1節　出土遺物の構成 …… 20
　第2節　土器 …… 20
　第3節　石器 …… 20
　第4節　骨角器 …… 24
　第5節　金属製品 …… 25
第6章　まとめ …… 26

第１章　調査の実施体制について

第1節　バイカル・北海道考古学プロジェクト

バイカル北海道考古学プロジェクト（BHAP）は、カナダ、イギリス、アメリカ、ドイツ、ロシア、日本の研究機関による完新世の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動を比較研究する目的で 2011 年に組織された国際共同研究である。2011 年1月から 2017 年 12 月までの7年間にわたりカナダ社会科学・人文科学研究審議会（SSHRC）の中核的共同研究助成（MCRI）の支援を受けて実施されている。

当該プロジェクトの目的は、完新世初頭の気候環境変動の中で先史狩猟採集民社会がいかに地域適応し、独自の文化的多様性を生み出してきたのかを解明することにある。先史狩猟採集民に関する考古学研究には長い歴史があるが、とりわけ北半球に状況について多くの関心が寄せられてきた。その一方で、具体的な環境への適応行動と適応行動を通じて生み出された文化的多様性の詳細な様相は、未だ十分に解明されてはいない。
よって当該プロジェクトでは、以下の主要な検討課題を設定している。

1）内陸部と海岸部という異なる環境条件下での狩猟採集民社会の文化変動の検証
2）生物考古学的な手法を利用した環境変化が個々人に及ぼした具体的な影響の検証
3）遺跡と遺跡周辺でのサンプリングを通じた気候環境変動についての高精度のデータを採取

上記の課題を検証するために当該プロジェクトでは、主要なフィールドとしてユーラシア大陸内陸部と太平洋沿岸という大きく異なる環境条件を抽出し、完新世初頭の狩猟採集民社会の比較研究を進めていく。大陸内部の事例としては、東シベリアのバイカル湖周辺における新石器文化から青銅器文化への文化的変遷に焦点を当て、文化変化の動態と環境適応行動の解明を進めていく。一方、太平洋沿岸地域の事例としては、日本列島北部の先史狩猟採集民社会の文化的動態と環境適応行動の復元を進めていくことを目指している。

第2節　調査フィールドとしての礼文島

北海道島の西方 60km に位置する礼文島は、これまでも豊富かつ良好な考古学的、人類学的資料が発見されるフィールドとして知られてきた。これまでの調査では、縄文中期以降アイヌ文化期に至る南北双方から往来した人間集団の居住痕跡が残されている。とりわけ島北部の砂丘堆積物の中には、貝層や墓をともなった状態で数千年におよび人類活動の痕跡が良好に残されている。

本プロジェクトの目的である完新世初頭の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動の復元としては、礼文島は最良のデータが得られるフィールドである。プロジェクトとしては、このような礼文島北部の遺跡の立地環境に注目し、とくに船泊湾域の遺跡群において、1）居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2）砂丘形成過程と生業活動面の形成過程の相関関係の解明、3）古人骨資料からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4）遺跡周辺における古気候環境データの集成を目指すことにした。

第3節　研究拠点形成事業との関連

2012 年度からは、科学研究費補助金基盤研究 A「アイヌ民族文化形成過程に関する総合的研究」（研究代表者：加藤博文、2012-2015 年度）および日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点型）「北方圏における人類生態史総合研究拠点」（プロジェクトコーディネータ：加藤博文）の研究助成に採択されたことから、浜中2遺跡における考古学調査の実施主体を日本側の研究組織によって実施することとし、この考古学調査の実施中にバイカル・北海道考古学プロジェクトの事業の一環としての考古学実習を受け入れることとした。

第2章　浜中2遺跡の調査と概要

第1節　調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中2遺跡における国際共同調査は、2011 年度に完新世の先史狩猟最終民社会の復元と環境適応行動を比較検討するプロジェクトの一環として調査が開始された。調査の概要については、概要報告において提示した通りである。（加藤・岩波・平澤 2012）。

2012 年度は、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態を確認する調査を実施した。よって 2012 年度は発掘調査は行っていない。

2013 年度は、2011 年度の発掘区の一部を掘り下げ、下層へ続く文化層の時期を確認する調査と、調査区を南側へ拡張し、オホーツク文化期の貝層の広がりを確認すること、さらに近世アイヌ期の貝層やよりオホーツク文化期を遡る続縄文文化期の文化層の確認を目的として、2013 年 7 月 23 日から同年 8 月 20 日までの期間で発掘調査を実施した。

第2節　礼文島の環境

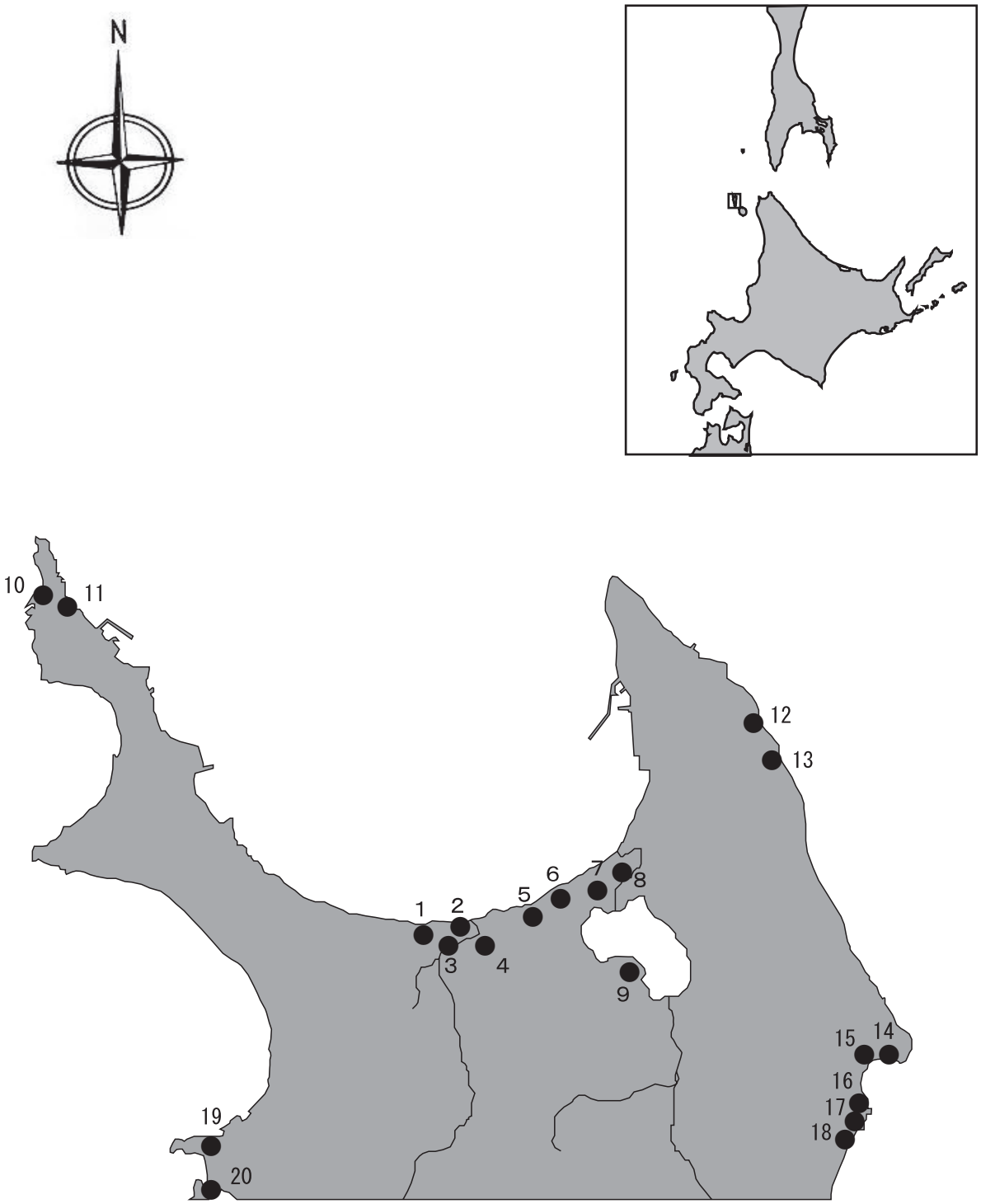
礼文島は、北海道島の北西約 60km に位置する離島である。南北に約 25.8km、東西に 7.9km と南北に細長く伸びる島である。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入り江状の地形を作り出している。島の北部は、一点して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まされた船泊湾は、遠浅の大きな内湾地形をつくりだしており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘状地形が広がっている。

島の最高地点は、礼文岳で 490m であり、低標高の緩やかな起伏もった島である。島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマザサが主体をなす。

島の北端に広がる船泊湾は、海岸沿いに広がる砂丘列と東部に位置する久種湖で構成される。湾の東部に位置する久種湖は、周囲 6km ほどの淡水湖である。湖の前面には、船泊砂丘が東西ほぼ 1km にわたり続いている。一方、船泊湾中央部には、島中央部より島最大の河川である大沢川が南から北へ向かい注いでいる。この大沢川の河口から湾の西側スコトン岬方向に向かい形成されているのが浜中砂丘である。これら二つの砂丘である船泊砂丘と浜中砂丘は、異なる時期に形成された複数の砂列帯によって構成されている。

第3節　遺跡の立地

船泊湾に広がる砂丘では、古くから石器や土器、そして人骨が出土することが知られてきた。これまでの調査でも縄文文化からアイヌ文化期のわたる複数の遺物包含層の存在が知られている。船泊湾東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期からアイヌ文化期にわたる遺物包含層が確認されている。この船泊砂丘の西端には、重平衛沢川が船泊湾に注いでいるが、砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層をもつ重平衛沢遺跡、重平衛沢2遺跡が知られている。



1: 浜中２遺跡、 ２：浜中１遺跡、 ３：神崎遺跡、 ４：浜中５遺跡、 ５：重平衛沢１遺跡、
６：重平衛沢２遺跡、 ７：船泊遺跡、 ８：オションナイ遺跡、 ９：沼の沢チャシ、
10：スコトン遺跡、 11：水難諸霊の塔遺跡、 12：幌泊第１遺跡、 13：幌泊第２遺跡、
14：上泊２遺跡、 15：上泊１遺跡、 16：上泊４遺跡、 17：上泊３遺跡、 18：東上泊遺跡、
19：鉄府イナウ遺跡、 20：西上泊遺跡

第1図　礼文島の位置と島北部の周辺の遺跡

船泊湾の中央部には、島内陸部から船泊湾に注ぐ大沢川の河口が位置する。この河口の西側の浜中砂丘には、浜中1遺跡と浜中2遺跡の存在が知られている。浜中1遺跡は、国道の北側、海側において貝層や墓が集中することに知られ、数多くの人骨資料が長年にわたり収集されてきた。遺跡の時期は、オホーツク文化から近世アイヌ文化期と推定されている。一方、浜中砂丘の南、後背丘陵の裾野には、神崎ウェンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグランドおよび旧教員宿舎において続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している。

浜中2遺跡の範囲は、現在の浜中集落にほぼ重なる。現在、国道がこの浜中砂丘を東西に貫いて走っており、集落中央に最も高い地点をもち、標高 10m を計る。砂丘の東西端では、緩やかな傾斜を示し、砂丘自体の比高差は5m 程度をはかる。

この浜中2遺跡は、いくつもの文化層が累積する多層位遺跡である。1987 年には、国道の拡幅を原因とする事前調査が行われ、続縄文文化からオホーツク文化にかけての生活面が累積することが明らかとなった。また 1990 年には浜中集落の配水管の付替え工事に際する事前調査が行われ、浜中砂丘の包含層が続縄文文化期からアイヌ文化期にかけての多層位遺跡であることが明らかとなった。その後、1990 年代に筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が継続的に実施され、浜中2遺跡には、厚い貝層や住居、墓をともなう複合的な生活痕跡が長年にわたって累積していることが明らかにされている。また 2011 年から 2013 年にかけて千葉大学文学部考古学研究室によって浜中砂丘の最高地点（旧中島商店敷地）において、発掘調査が実施されている。

第4節　調査組織と参加者

2013 年度の調査には、バイカル・北海道考古学プロジェクトのメンバーから以下の研究者が参加し、調査助言および参加学生向けの野外講義をおこなった。

David. Yesner 教授（アラスカ大学アンカレッジ校）、Benjamin. Fitzhugh 教授（ワシントン大学）、羽生淳子教授（カリフォルニア大学）

また日本学術振興会の支援を受けた研究助成プロジェクトの関係では、安達登教授（山梨大学医学部）、石田肇教授、木村亮介准教授（以上、琉球大学大学院医学研究科）、増田隆一教授（北海道大学大学院理学研究院）、江田真毅講師（北海道大学総合博物館）、澤田純明講師（聖マリアンナ大学医学部）、Mark Hudson 教授（西九州大学リハビリテーション学部）が参加した。

国際フィールドスクールの参加学生は、以下のような構成となっている。

カナダ（アルバータ大学、マックウェワン大学）16 名、アメリカ（ハーバード大学、コロラド州立大学、ハワイ大学）4名、英国（アバディーン大学、オックスフォード大学）3 名、日本（慶応義塾大学、琉球大学、北海道大学）17 名の 4 カ国から 40 名の学生、院生が参加した。また北海道アイヌ協会を通じて公募したアイヌ文化を学ぶ若手育成プログラム参加者として 3 名の調査実習生が参加した。

なおカナダからの参加学生と北海道大学からの参加学生は、考古学実習の授業の一環として参加している。

参考文献

加藤博文、岩波連、平澤悠　2012『2011年度北海道礼文町浜中2遺跡考古学調査概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、http://hdl.handle.net/2115/52658

第3章　調査区について

第1節　調査区の設定

浜中砂丘は、現在の浜中集落が位置する海岸沿いの大きな砂列帯と、大沢川左岸、神崎小学校側に延びる小規模の複数の砂列帯で構成されている。内陸側の小規模な砂列帯は、集落や畑作などによる地形改変の結果、現状においてその起伏を確認することができない。

2013 年度の調査区は、2011 年度の調査のうち、A03 グリット内の 6 ㎡の範囲を深堀区として設定し、オホーツク文化期よりも下層の文化層の確認をおこなった。調査区として設定したグリットは、A03-a3 区、A03-b3 区、A03-b4 区、A03-c1 区、A03-c2 区、A03-d3 区となる。

このほか、2011 年度のテストピットの周辺および貝層の崩落の恐れの強い A03 区の北壁部分の貝層部分の掘り下げを行った。この地域で拡張した調査区は、Z03-b2 区、Z04-d3 区、A04-c 1 区、A04-c4 区、A04-d3 区、A04-d4 区の 6 ㎡の範囲である。

2013 年度に新規で拡張した調査区は、2011 年度の調査区の南側部分であり、A-02 区である。この調査区では、2011 年度の調査においてオホーツク文化期の貝層の広がりの南限が確認できる可能性が想定されていたため、これを確定するために設定したものである。調査面積は、16 ㎡である

グリットの設定は、調査地を借用した中谷栄氏の所有地の南西隅に基準杭を設置し、4m 四方のグリットを設定している。グリットの番号は、南北方向をアラビア数字で、東西方向はアルファベットで表記し、これらの交差点をもって呼称している（第2図参照）。2013 年度の発掘調査範囲は、計 28 ㎡である。

第2節　調査区の層序

調査区で観察された堆積層は、砂丘形成層としての砂層と人為的に堆積された魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは、互層状となって厚い文化層を形成している。最も厚く堆積している魚骨層はラミナ状に堆積しており、調査区全域に連続して広がるものではなく、部分的に重なりながら、局所的に広がりを見せて堆積している。

調査区全体としての基本土層は、上層から

Ⅰ層：表土層および撹乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む

Ⅱ層：砂層、中世から近世アイヌ期のアワビの貝層を含む

Ⅲ層：オホーツク文化期の魚骨層を主体とする貝層

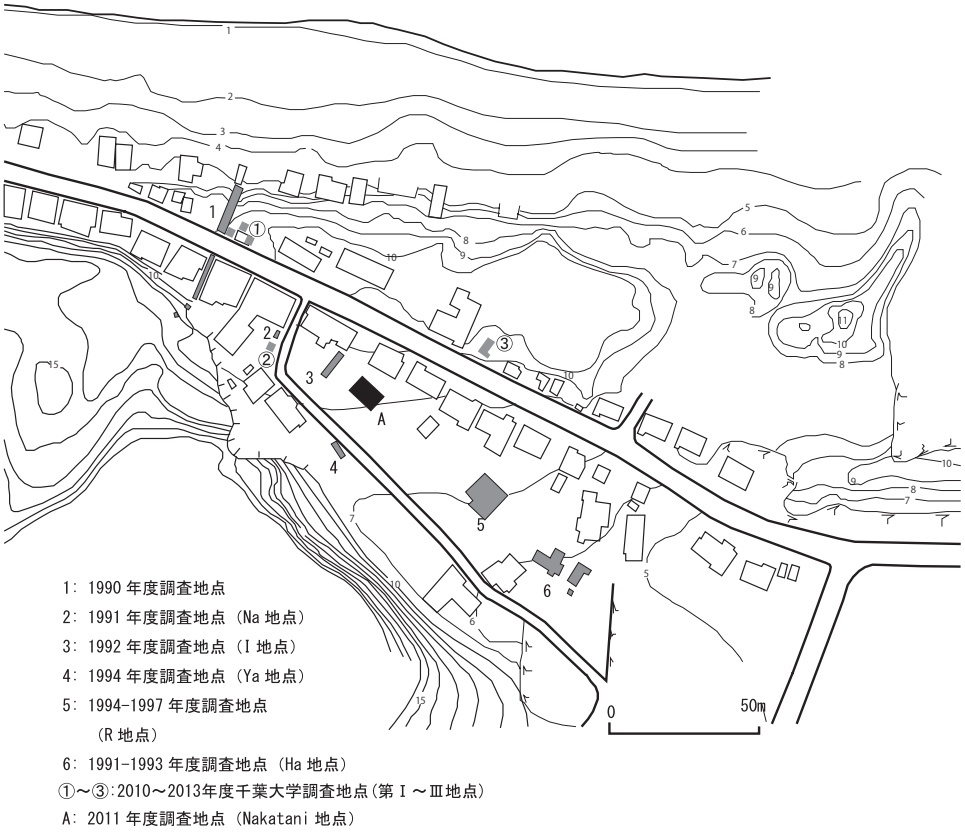
Ⅳ層：無遺物砂層

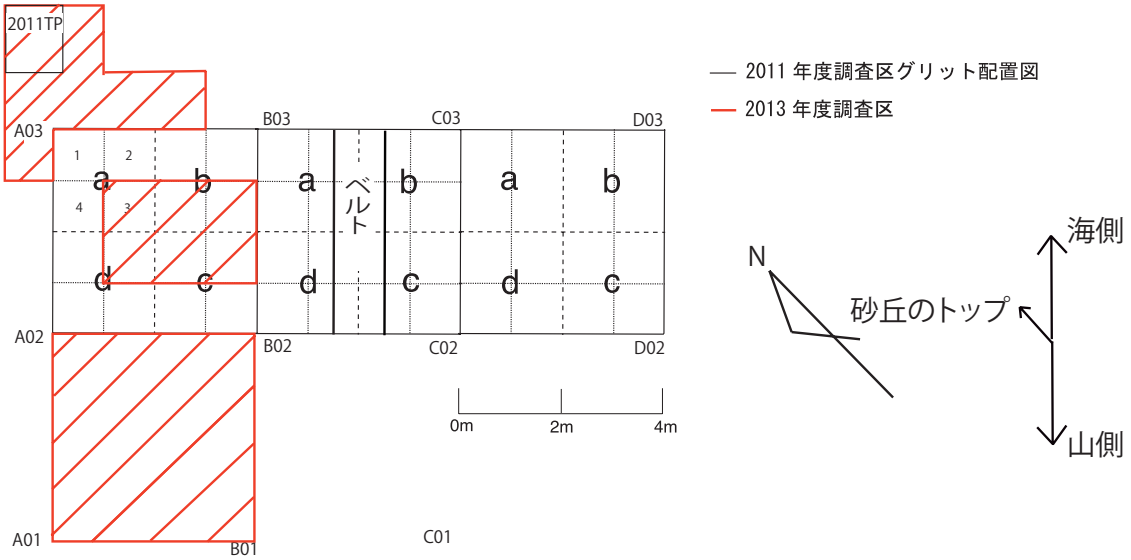
Ⅴ層：十和田文化期の文化層および獣骨層

Ⅵ層：無遺物砂層

Ⅶ層：続縄文文化期の包含層、となる。

Ⅰ層は、2011 年度の調査区では、ほとんど撹乱のため確認できなかったが、2013 年度の新たに拡張した A02 区においては、良好に残されており、さらにⅠ層を細分することが可能となっている。Ⅲ層であるオホーツク文化期の魚骨層は、複数回の投棄により形成されており、部分的に細分することが可能な一方で、調査区全体を通して連続するものではない。また A02 区では、魚骨層は次第にその厚みを失い、黒色土層を呈する文化層として連続している。このような複雑に形成された堆積層において、上層から何枚か確認できる無遺物層の砂層は、分層の基準となる鍵層となっている。このような無遺物層の鍵層は、オホーツク文化期中ではⅣ層として、またオホーツク文化期と続縄文文化期の文化層を分つ、Ⅵ層として確認できる。以下では、このような調査区北側の 2011 年度のテストピットに隣接する Z03 調査区西壁で観察される土層段面と 2013 年度に新たに南側に拡張した A02 調査区西壁に分けて以下に説明する。





第2図　遺跡周辺の地形と調査区配置図

1）Z03 調査区西壁で観察された堆積層

Z03 区では、調査区地表面が北西隅を頂点に南方向にゆるやかに傾斜した斜面を呈している。調査区で観察された堆積層もこのような現地表面の傾斜を反映して、緩やかに南側に傾斜した堆積となっている。

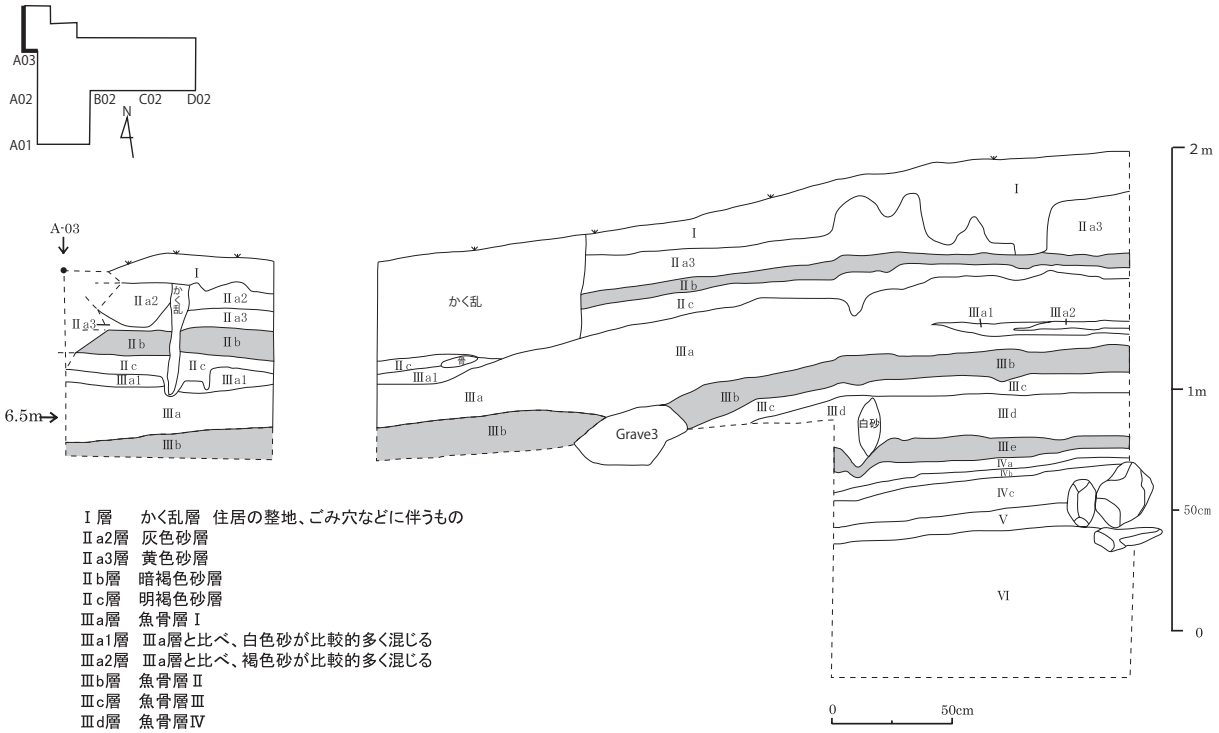
Ⅰ層：表土層。住居の整地や耕作による撹乱が見られる。I 層自体を分層することはできない。
Ⅱ層：砂層。中・近世アイヌ期の堆積層と推定される。魚骨や海獣骨はそれほど出土しない。アワビの貝殻の表面には、断面四角形の金属製のヤスによる刺突痕が見られる。白色砂の薄層である IIa、IIc 層とその間の間層である褐色砂の IIb 層に分層できる。
Ⅲ層：オホーツク文化期の魚骨層。魚骨やウニの混入の度合い、間層として貫入する砂層や炭層によって分層できる。各層から出土した土器型式と対比すると以下のようになる。
Ⅲ a 層：魚骨層Ⅰ。元地式土器を出土する。
Ⅲ b 層：魚骨層Ⅱ。元地式土器と沈線文式土器を出土する。小児を埋葬した第3号墓の掘込み面がこの土層断面で確認できる。

＊ Z03 区で面的に確認されたのはこの層面までであり、以下はテストピットのみで確認されている。

Ⅲ c 層：魚骨層Ⅲ。沈線文式土器を出土する。
Ⅲ d 層：魚骨層Ⅳ。沈線文式土器を出土する。
Ⅲ e 層：魚骨混じりの褐色砂層。他の魚骨層と比べ、砂の割合が高い。刻文式土器を出土する。
Ⅳ層：白色砂と褐色砂層。無遺物層。
Ⅴ層：褐色砂層。十和田式土器を出土する
Ⅵ層：白色砂層。無遺物層。

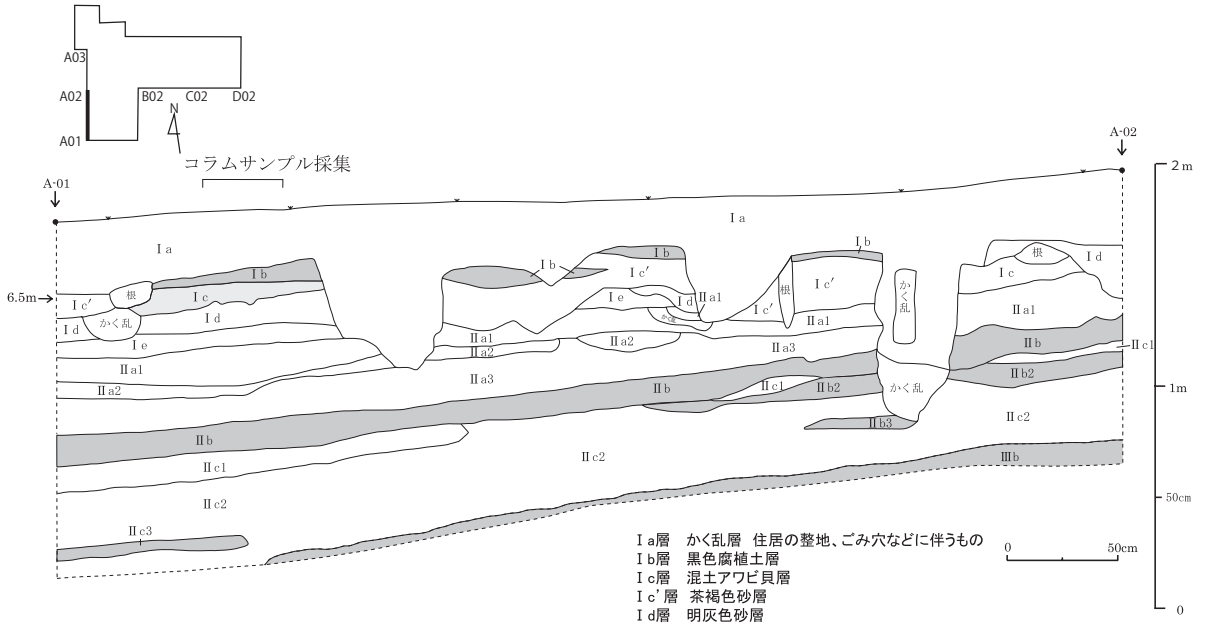
2）A02 区の層序

Ⅰ層：表土層。住居の整地、耕作による撹乱が見られるが、発掘区南側に行くほど厚く堆積しており、Ia 層から Ie 層に分層が可能である。魚骨や貝片などを少量含んでいる。
Ⅰ a 層：住居の整地やごみ穴の掘削などによる撹乱層
Ⅰ b 層：黒色土層
Ⅰ c 層：混土アワビ貝層　A02 区の南側の一部に確認できる。細かく破砕したアワビ貝を含む。アワビ貝層の明確な帰属時期は不明である。
Ⅰ c’層：茶褐色砂層　Ⅰ c 層と同じ色調だが、アワビを含まない。
Ⅰ d 層：明灰色砂層　無遺物層
Ⅰ e 層：灰色砂層　無遺物層
Ⅱ層：砂層　発掘区南側に行くほど厚く堆積している。近世アイヌ期の貝層やアシカを含む送り場遺構が確認されている。堆積層と推定される。2011 年度に調査した A03 区では IIa、IIb、IIc 層に分層したが、A02 区では層厚が増したことにより、さらに分層が可能となっている。全体的にしまりのない砂層である。
Ⅱ a 層：極淡褐色砂層　無遺物層
Ⅱ a2 層：灰色砂層　無遺物層
Ⅱ a3 層：黄色砂層　無遺物層
Ⅱ b 層：暗褐色砂層　近世アイヌ期のアシカとアワビを含む送り場が確認されている。
Ⅱ c1 層：白色ないし明褐色砂層　無遺物層
Ⅱ c2 層：褐色砂層　無遺物層
Ⅱ c3 層：暗褐色砂層　レンズ状に部分的に堆積している　無遺物層



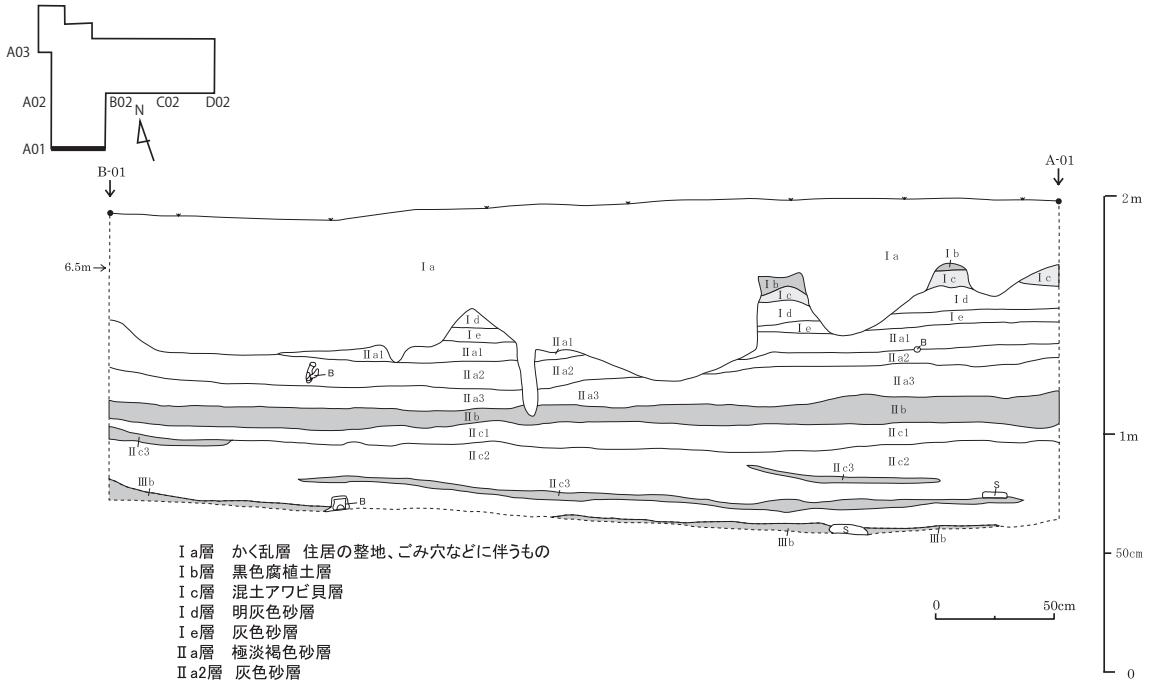
Ⅰ層　かく乱層　住居の整地、ごみ穴などに伴うもの
Ⅱa2層　灰色砂層
Ⅱa3層　黄色砂層
Ⅱb層　暗褐色砂層
Ⅱc層　明褐色砂層
Ⅲa層　魚骨層Ⅰ
Ⅲa1層　Ⅲa層と比べ、白色砂が比較的多く混じる
Ⅲa2層　Ⅲa層と比べ、褐色砂が比較的多く混じる
Ⅲb層　魚骨層Ⅱ
Ⅲc層　魚骨層Ⅲ
Ⅲd層　魚骨層Ⅳ
Ⅲe層　魚骨層Ⅴ
Ⅳa層　白色砂層
Ⅳb層　褐色砂層
Ⅳc層　黄色砂層
Ⅴ層　暗褐色砂層
Ⅵ層　褐色砂層

第3図　Z03 調査区西壁土層断面図



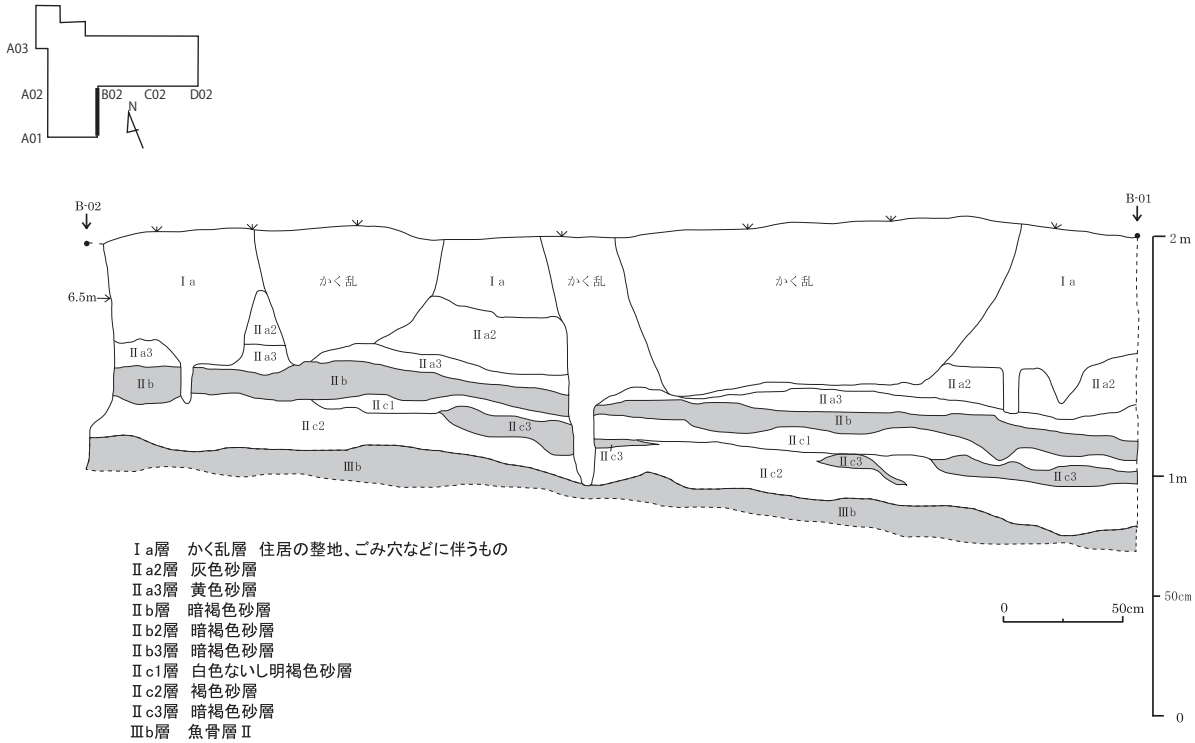
Ⅰa層　かく乱層　住居の整地、ごみ穴などに伴うもの
Ⅰb層　黒色腐植土層
Ⅰc層　混土アワビ貝層
Ⅰc′層　茶褐色砂層
Ⅰd層　明灰色砂層
Ⅰe層　灰色砂層
Ⅱa1層　極淡褐色砂層
Ⅱa2層　灰色砂層
Ⅱa3層　黄色砂層
Ⅱb層　暗褐色砂層
Ⅱb2層　暗褐色砂層
Ⅱb3層　暗褐色砂層
Ⅱc1層　白色ないし明褐色砂層
Ⅱc2層　褐色砂層
Ⅱc3層　暗褐色砂層
Ⅲb層　魚骨層Ⅱ

第4図　A02 調査区西壁土層断面図



Ⅰa層　かく乱層　住居の整地、ごみ穴などに伴うもの
Ⅰb層　黒色腐植土層
Ⅰc層　混土アワビ貝層
Ⅰd層　明灰色砂層
Ⅰe層　灰色砂層
Ⅱa層　極淡褐色砂層
Ⅱa2層　灰色砂層
Ⅱa3層　黄色砂層
Ⅱb層　暗褐色砂層
Ⅱc1層　白色ないし明褐色砂層
Ⅱc2層　褐色砂層
Ⅱc3層　暗褐色砂層
Ⅲb層　魚骨層Ⅱ

第5図　A02 調査区南壁土層断面図



Ⅰa層　かく乱層　住居の整地、ごみ穴などに伴うもの
Ⅱa2層　灰色砂層
Ⅱa3層　黄色砂層
Ⅱb層　暗褐色砂層
Ⅱb2層　暗褐色砂層
Ⅱb3層　暗褐色砂層
Ⅱc1層　白色ないし明褐色砂層
Ⅱc2層　褐色砂層
Ⅱc3層　暗褐色砂層
Ⅲb層　魚骨層Ⅱ

第6図　A02 調査区東壁土層断面図

第4章　検出された遺構

第1節　近世アイヌ期の遺構

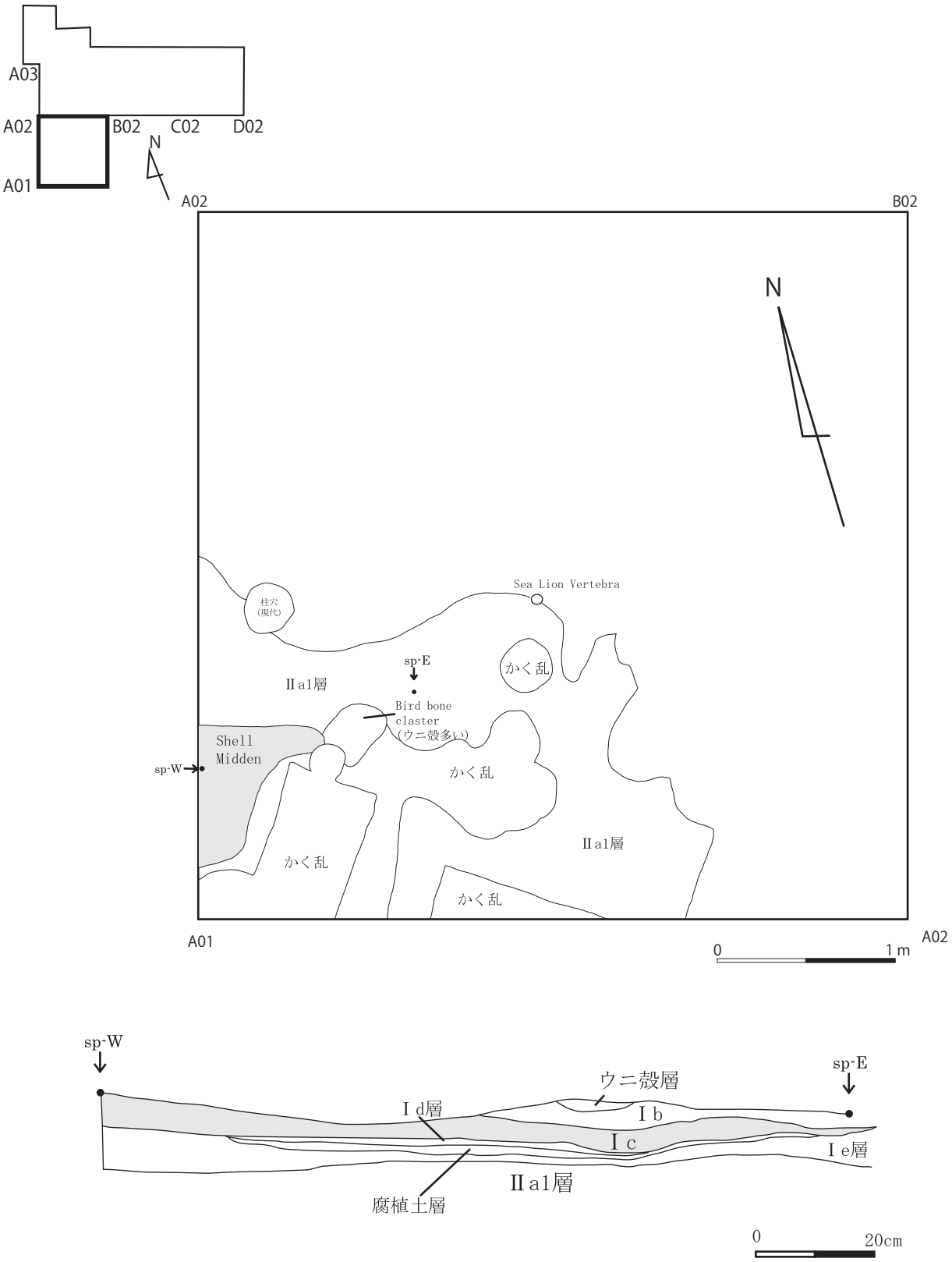
2011 年度の調査においても、I 層から II 層にかけてアワビの貝殻が確認されており、明確な貝層として把握はできなかったが、近世アイヌ文化期に相当するアワビを主体とする貝層の確認が調査課題のひとつであった。2013 年度の調査では 2011 年度の調査区の南側に新たに調査区を拡張している。この拡張区において I 層と II 層中で近世アイヌ期と推定される遺構を確認することができた。

1）　アワビ貝層（第7図）

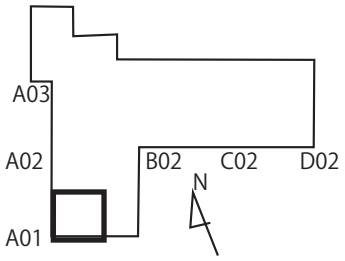
南側に拡張した調査区 A02 調査区の南西隅において確認されたアワビ貝で構成される貝層である。A02 区西壁、南壁セクション図のⅠｃ層に対応する。地表面からは 35cm ほどの深さに位置する。周辺は、住宅に関連する整地やゴミ穴と想定される撹乱穴によって乱されており、その広がりの全容は不明である。貝層を構成する貝種としては、アワビ貝の他にもヒメエゾボラやウバガイを含み、ソイ類を中心とした魚骨も多く含まれている。いずれも細かく破砕しているため詳細な構成比を提示することはできない。また貝層の周囲には、ブロック状に鳥の骨とウニ殻の集中が見られた。貝層の規模と関連して指摘できるのは、貝層の投棄された規模が小規模であり、組織的かつ集約的に形成された貝層とはみなしえないことである。世帯単位ないしは、単発的に形成された小規模な貝層である。この貝層に伴う人工遺物は、検出されていない。よって帰属時期の特定は不可能である。現段階では便宜的に、近世アイヌ期ないしはそれ以後の時期に残された貝層として理解しておく。

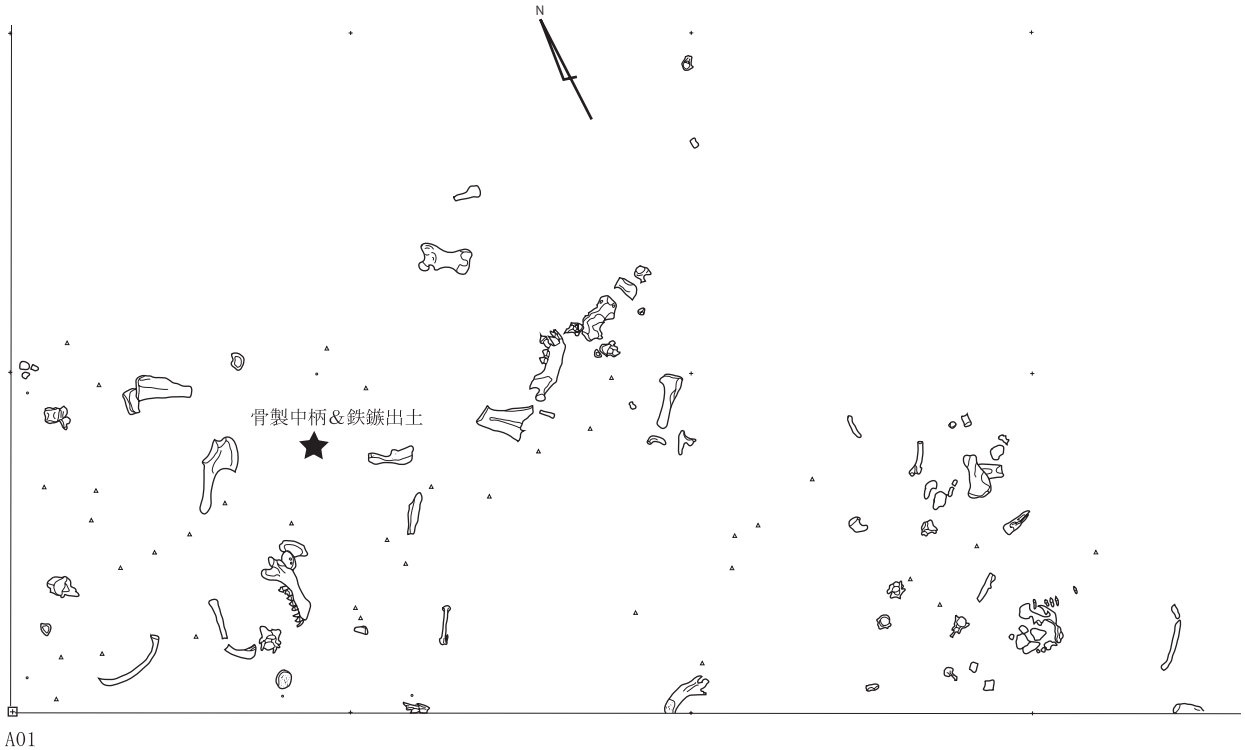
2）　近世アイヌ期の送り場遺構（第8図）

A02 調査区の南西隅において II 層中で確認された遺構である。無遺物層である灰色砂層 IIa 層が被覆している。複数個体のトドとアホウドリの骨がやや緩慢に広く分布し、集中区を形成している。この海獣骨と鳥骨の集中に伴い、金属製の鏃を骨製の中柄に装着した鏃が出土している。中柄は、中部で折損しており、鉄製の鏃も先端を折り曲げられている。それぞれ人為的な破損とみなしえる。この遺構に伴う年代測定分析の結果は、まだ得られていない。しかしながら、出土層位と動物骨との共伴関係、鏃の人為的破損の状況を総合的に判断して近世アイヌ期の海獣と海鳥の狩猟と関係する送り場遺構であると理解される。



第7図　Ⅰ層中で確認されたアワビ貝層の広がり





△Bird bone
全て一括取り上げ
pharanx, rib,その他は一括取り上げ

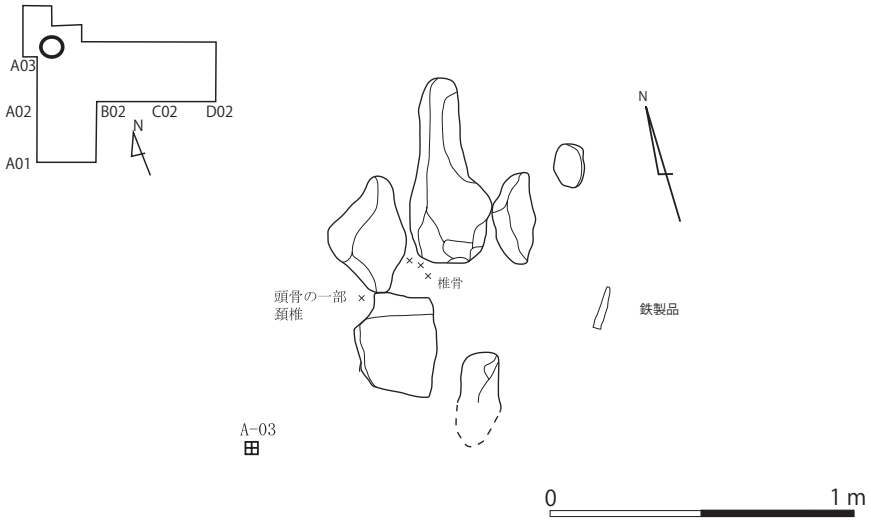
第8図　近世アイヌ期（Ⅱ層）の送り場遺構平面図

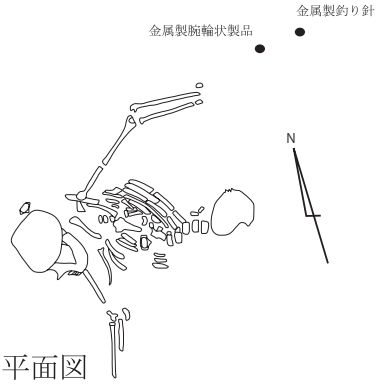
第2節 オホーツク文化期の遺構

1）土壙墓

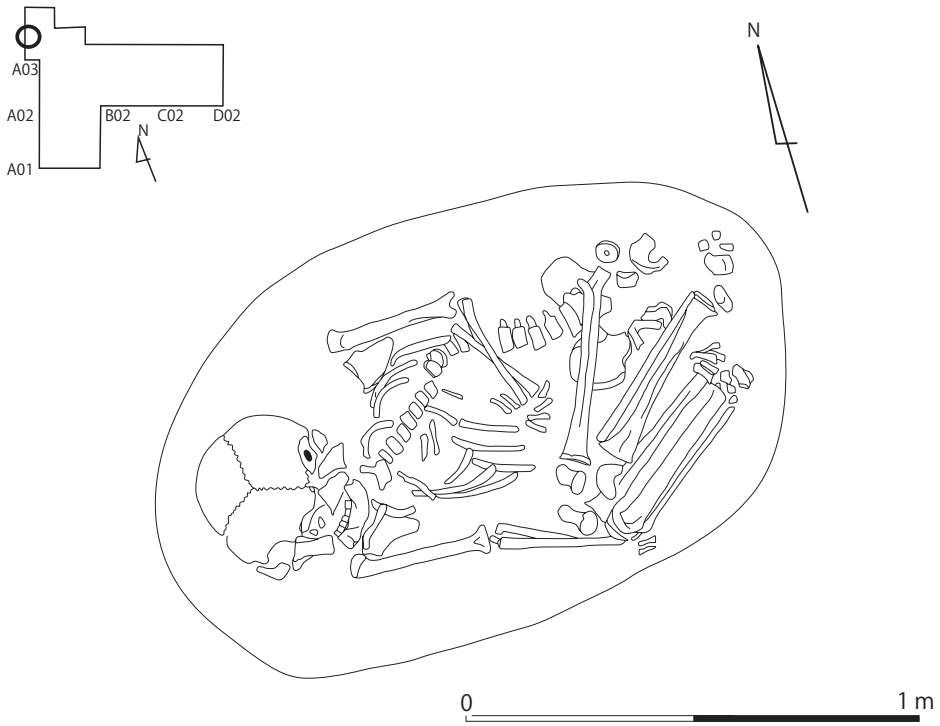
＜第2号墓＞

A03 区南東隅で確認されたオホーツク文化期終末期の埋葬例である。2011 年の調査時に第1号墓が検出されていることから、2013 年度の墓についても通し番号で記載することとしたため、本事例を第2号墓と呼称する。魚骨層Ⅰの上面において確認された。埋葬遺体の上に径 20cm から 50cm の石が配置されており、墓の上部遺構であると推定される。埋葬後に撹乱を受けており、右半分の骨盤と下肢骨は確認されなかった。また上肢の位置も埋葬後に動いた可能性がある。詳細な骨学的所見は本報告にゆずるが、被葬者は推定年齢 40 歳前後の成人女性であることが判明している。墓としての明確な掘込みは確認することができなかった。遺体周辺には、元地式の土器片や貝片、鉄製刀子1点、鉄製釣針 1 点、金属製の腕輪が出土している。出土状況からみて第2号墓に伴う副葬品であると思われる。確認された層位と遺体周辺で確認された土器型式からオホーツク文化最終末段階の元地式の時期の埋葬例であると推定される。年代測定を実施しているが、測定結果はまだ出ていない。





第9図 第2号墓平面図



第10図　第3号墓平面図

＜第3号墓＞

Z03 区中央部で検出されたオホーツク文化期後半期の埋葬例である。調査区西壁に接していたために、魚骨層Ⅱと呼称するⅢｂ層から掘込まれ構築された土壙墓であることが確認できた。墓壙は、魚骨層ⅢであるⅢｃ層を掘込んで構築されており、平面形は長軸 117cm、短軸 76cm の楕円形を呈し、やや浅く掘りくぼめられている。遺体の埋葬姿勢は屈葬であり、過去の浜中2遺跡の調査で検出された埋葬例と共通する特徴を有する。副葬品は見られなかった。骨学的所見の詳細は本報告にゆずるが、被葬者は推定年齢 10-12 歳前後の小児である。墓の掘込み面と墓壙の確認面など層位から判断してオホーツク文化後半期の沈線文式の時期の埋葬例である。年代測定を実施しているが、測定結果はまだ出ていない。

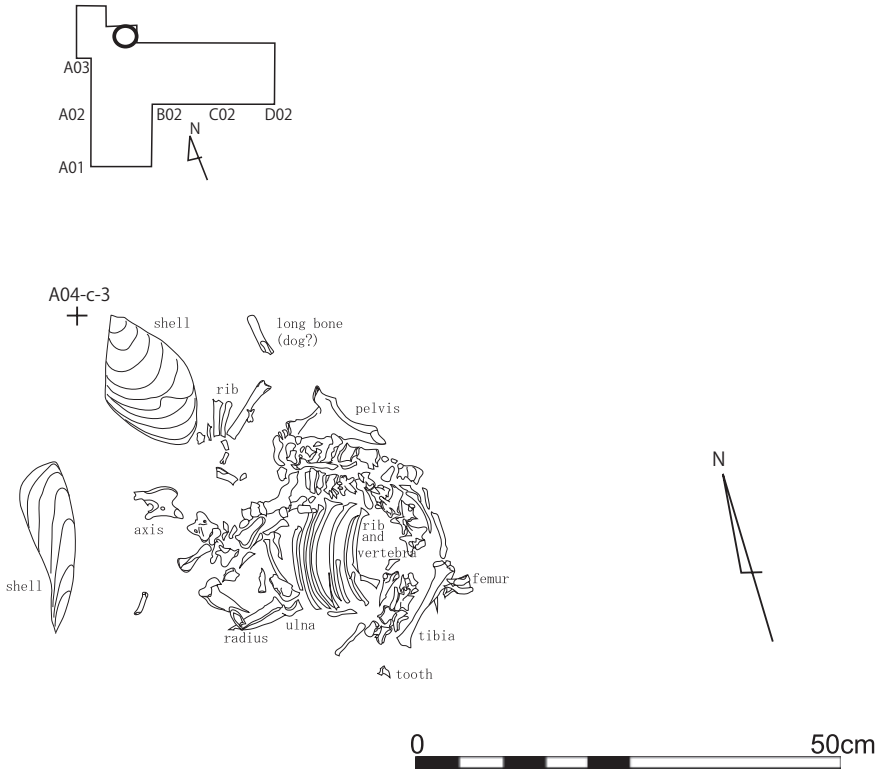
2）動物骨集中

魚骨層中には、海獣骨を主体とする動物骨が数多く含まれていた。なかでも注目されるのは、オホーツク文化期の包含層から続縄文文化期の包含層にかけて、イヌの全身骨が投棄された様相が多く観察された点である。2011 年度の調査においてもイヌの全身骨の投棄事例は複数個体確認されている。詳細については、現在慶応義塾大学において分析中である。

2013 年度の調査においても、オホーツク文化期の魚骨層の掘り下げ過程においてイヌの全身骨や部分骨の投棄事例が確認された。ここでは、オホーツク文化期の魚骨層中で確認されたイヌの投棄事例について概要を報告する。オホーツク文化期の魚骨層から確認されたのは、イヌ個体 No.3 とイヌ個体 No.4 である。共に A03 区において確認された。

イヌ個体 No.3 は、魚骨層Ⅱ であるⅢ b 層中で検出された。遺存状況は良好ではなく、細かく破損している。帰属時期は、出土層位から判断して沈線文式の段階である。

イヌ個体No.4は、魚骨層ⅢであるⅢ c 層中で検出された。頭骨を欠如するが胴部および四肢骨がまとまっており、ほぼ解剖学的姿勢を保った状態で投棄されている。遺存状態は良好である。帰属時期は、出土層位から判断して沈線文式の段階である。

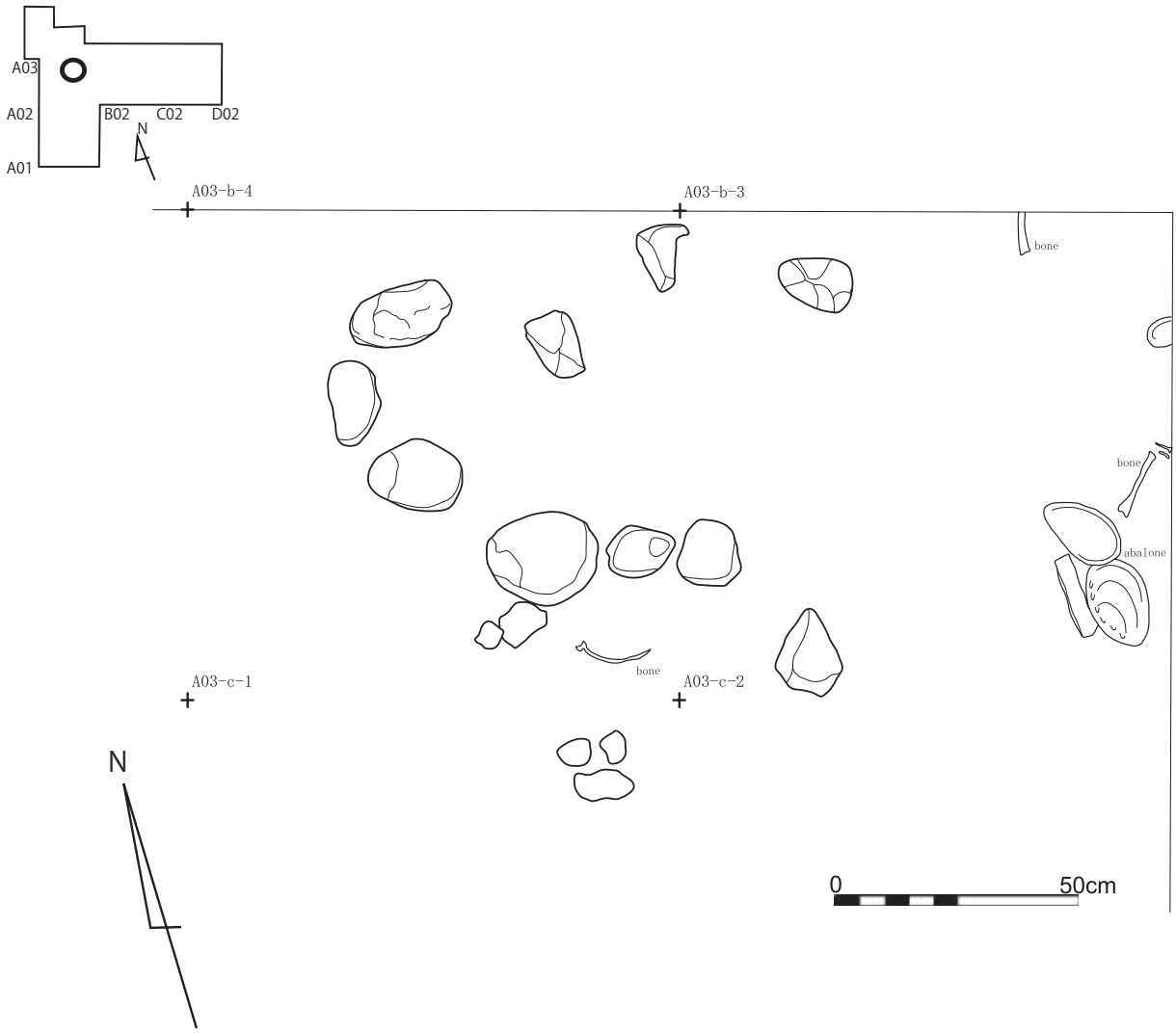


第11図　魚骨層Ⅲ中に投棄されたイヌ個体 No.4 の検出状況

第3節　続縄文文化期の遺構

1）　石囲い炉

A03 区の深堀り区において、Ⅶ層上面で石囲い炉が確認された。手のひら大の扁平の円礫を環状に配置している。炉の内部と周囲には炭が黒く広がりを見せている。炉の内部には、複数箇所で黒曜石と頁岩の微細砕片の集中が確認されている。周囲からイヌの投棄された遺体やアワビ貝殻、頁岩製の両面加工石器が出土している。出土した土器は、無文の細片が多いが、いくつか文様が確認できた土器片から推定して続縄文文化期のメクマ式の土器が確認されている。したがってこの石囲い炉の帰属時期も同段階であると推定される。これらの状況からⅦ層上部には、続縄文文化期の生活面が広がっていることが確認された。



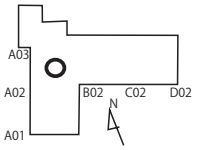
第12図　続縄文文化期（Ⅶ層上部）の石囲い炉平面図

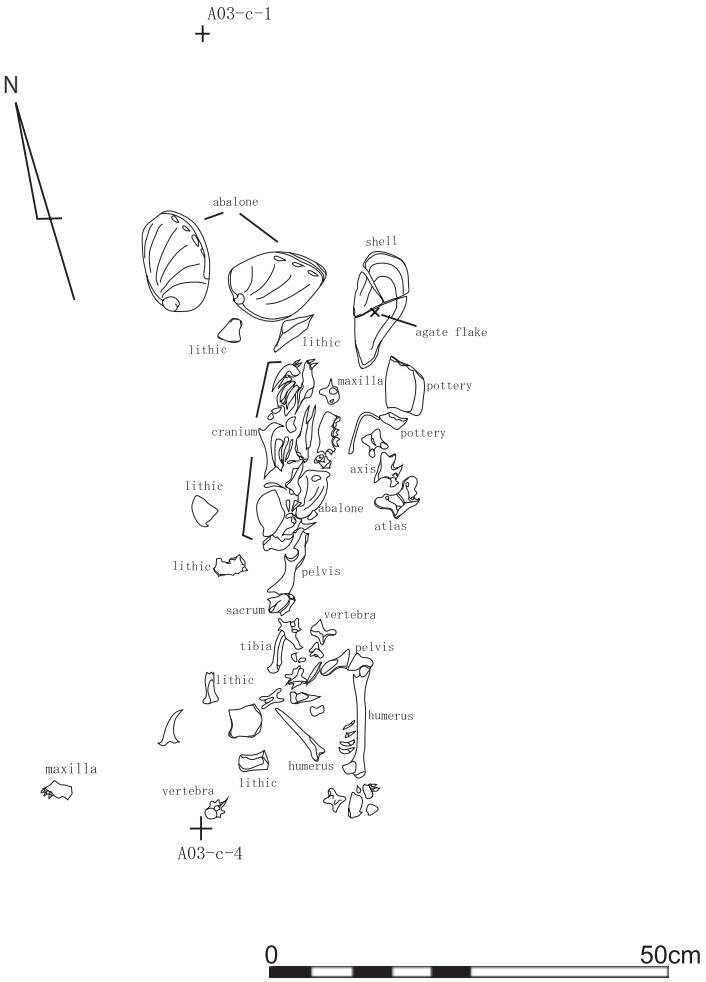
2）　動物骨集中

石囲い炉が確認されたA03区のⅦ層上面では、石器類の集中とともにイヌの投棄された遺体が確認された。調査区内において確認されたイヌ個体は2個体であり、それぞれイヌ個体No. 1とイヌ個体No. 5と呼称されている。

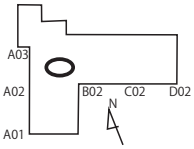
イヌ個体No. 1は、石囲い炉の南西側で確認された。周囲には大型のアワビ貝や両面調整を施された頁岩製の石器が見つかっている。一部の骨は失われているが、下顎骨や四肢骨などほぼ全身の骨が出土している。

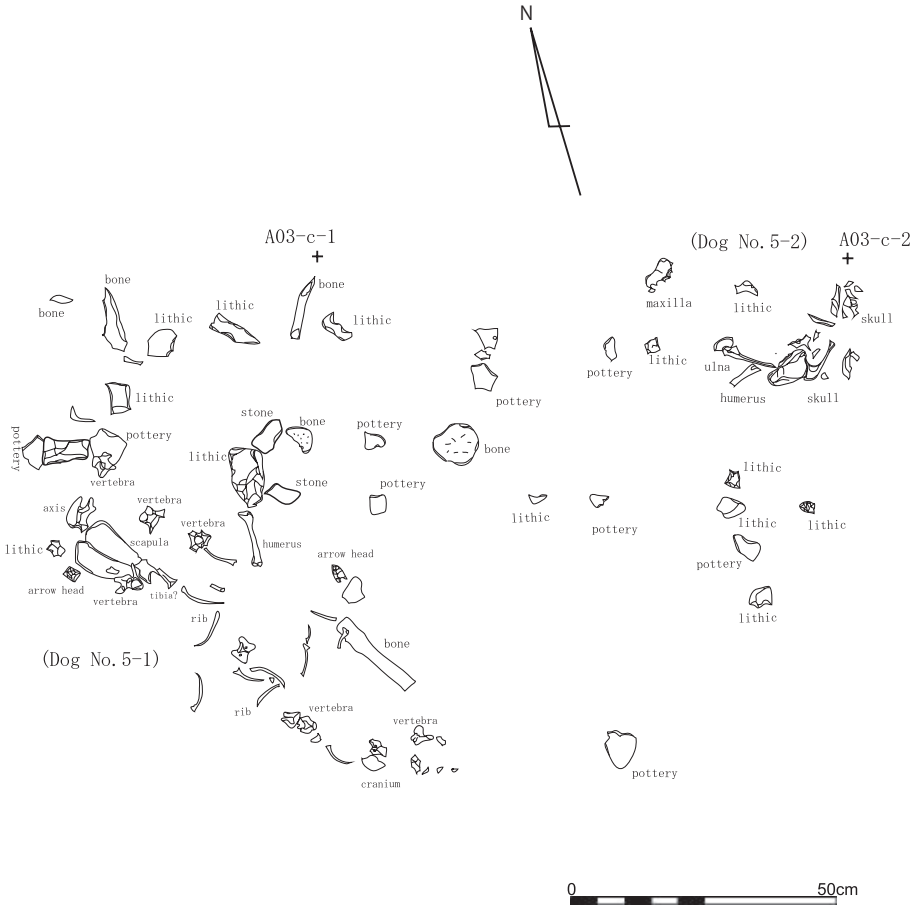
イヌ個体No.5は、石囲い炉の南側に投棄されたものである。当初1個体と捉えていたが、出土状況や接合を試みた結果2個体分の骨が含まれていることが判明した。取り上げ時にはそれぞれNo.5-1およびNo.5-2として個体ごとに取り上げている。イヌ個体No.1と同様に、周辺には頁岩製の剥片の広がりが認められた。





第13図　Ⅶ層中に投棄されたイヌ個体No.1の検出状況





第 14 図　Ⅶ層中に投棄されたイヌ（個体 No.5-1 および No.5-2）の検出状況

第5章　主な出土遺物

第 1 節　出土遺物の構成

調査においては、アイヌ文化期と推定されるⅠｂ層から続縄文文化期と推定されるⅦ層まで各層から多様な遺物が出土した。各層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中であるが、現場においてトータルステーションを用いて 3D データを記録して取り上げた資料は土器 540 点、石器 918 点、骨角器類 41 点、金属器 17 点、動物遺存体 737 点、炭化物サンプル 33 点、埋葬人骨2点の計 2288 点であった。

第 2 節　土器

土器は調査区全体から出土した。主体はⅢ層より出土するオホーツク文化期のもので、元地式、沈線文式、刻文式が確認されている。Ⅶ層では続縄文文化期の土器が出土しているが、数は少ない。底部片から胴部まで接合できたものもあったが、完全な器形復元が可能な土器は確認されていない。近世アイヌ文化期と推定したⅡ層中においても若干数土器片が出土しており、層序と年代はより検討が必要となっている。

第 15 図の 1 ～ 4 はⅦ層から出土した続縄文文化期の土器である。いずれも胴部から底部の土器であるため、型式の判定が困難である。

5 ～ 9 はオホーツク文化期の刻文式の土器である。私たちの調査地点では刻文式はⅢｃ層以下にあたるため、今年度の調査ではそれほど出土しなかった。

10 ～ 16 は沈線文と刻文が同時に施されたものである。Ⅲｂ層で比較的多く見られた。

第 16 図の 1 ～ 8 は沈線文式の土器である。Ⅱｃ～Ⅲａ層で多く出土した。

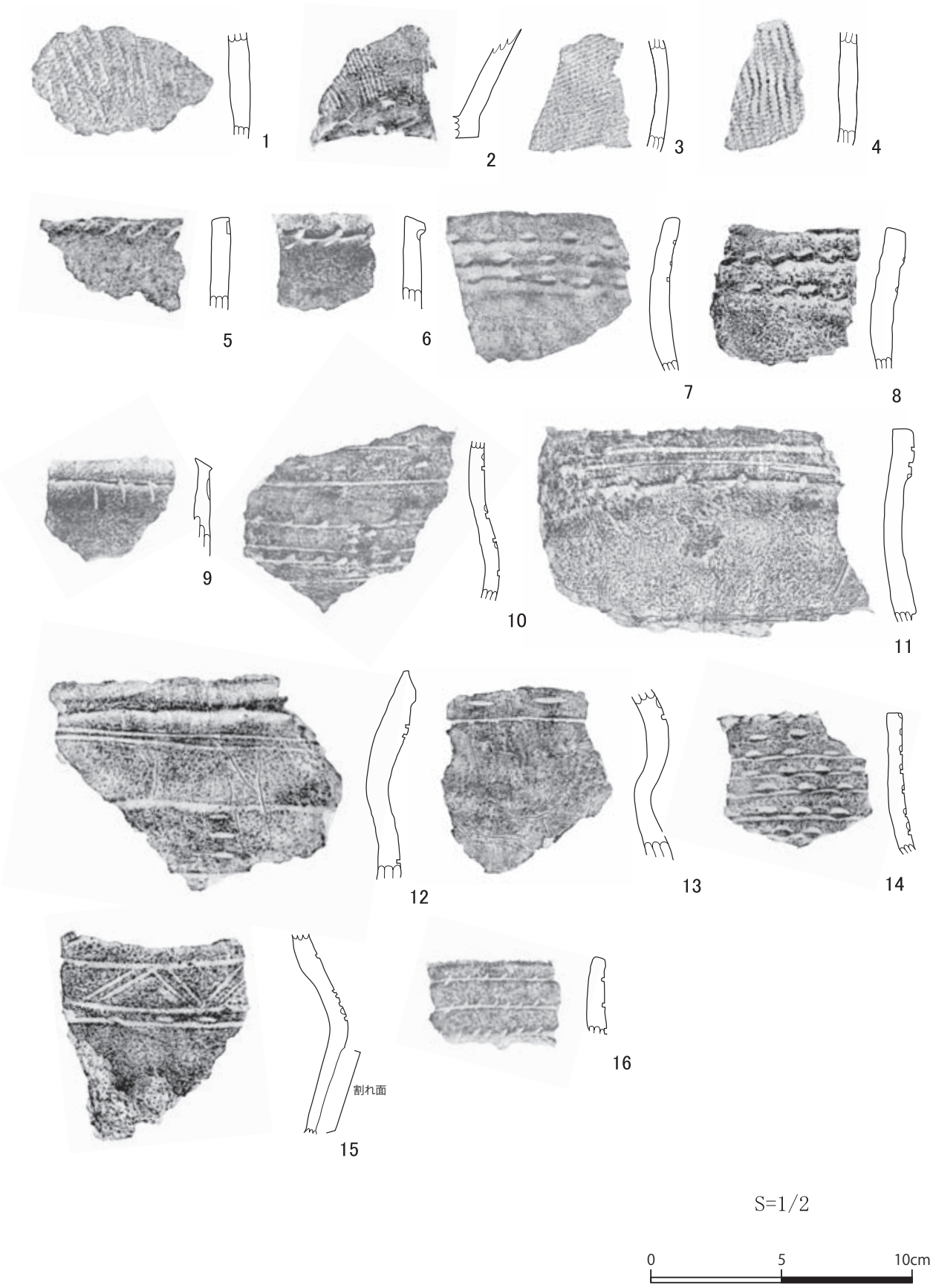
9 は刻みの入った貼付文が施されている。一般的にオホーツク文化において貼付文は道東部で後期に見られる土器文様である。浜中 2 遺跡でも貼付文の土器が出土しているが、数は非常に少ない。

10 ～ 13 は摩擦式浮文が施されている土器である。Ⅱｃ層～Ⅲａ層で出土した。

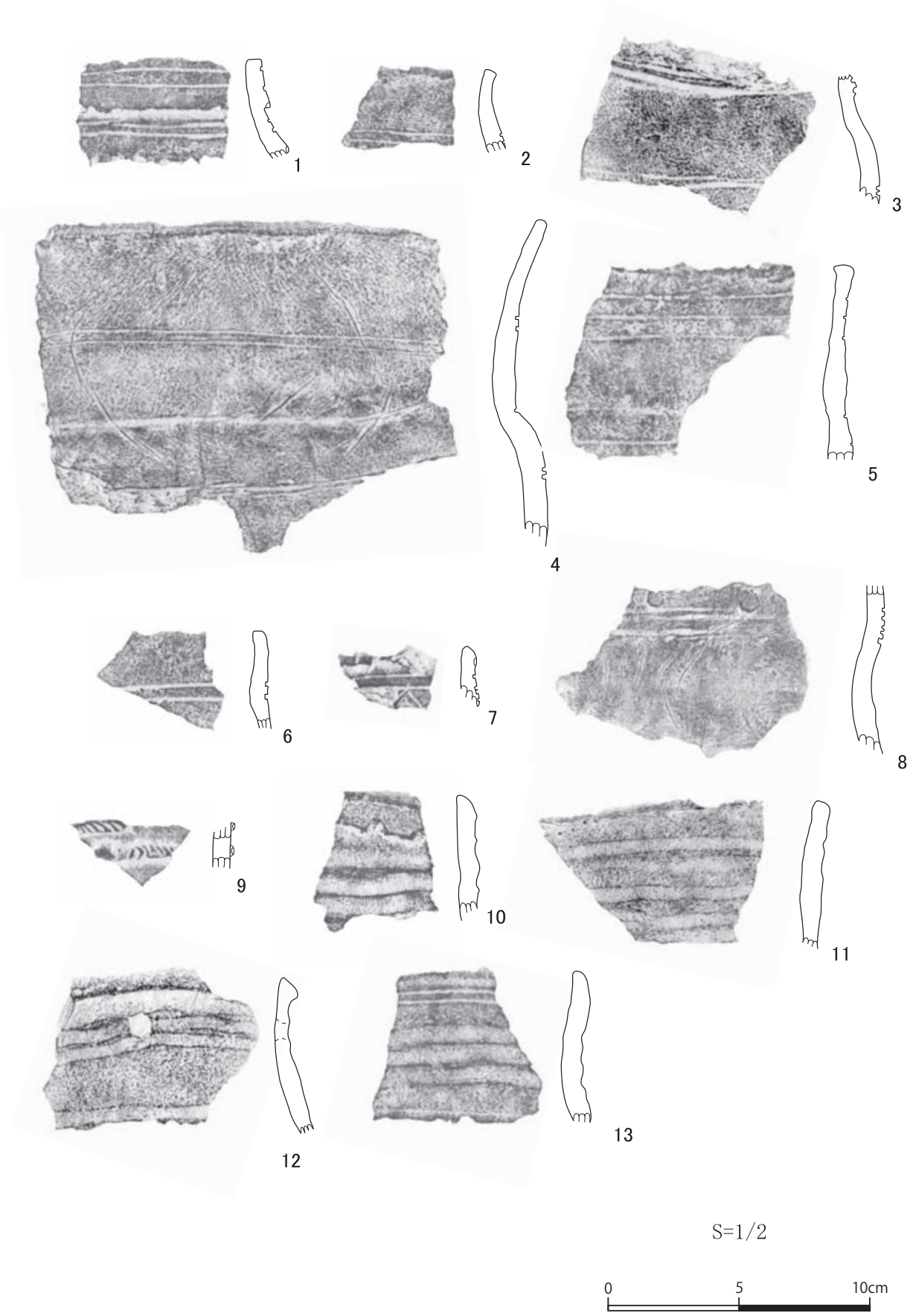
第3節　石器

石器は調査区全体から出土している。その大半は、剥片類であり、二次加工が施された定型的な器種は数少ない。定型的な石器器種が目立つのは、続縄文文化期であるⅦ層からの出土石器類である。石材の大多数は、在地石材である頁岩やメノウで、島外から搬入された石材である黒曜石は数少ない。

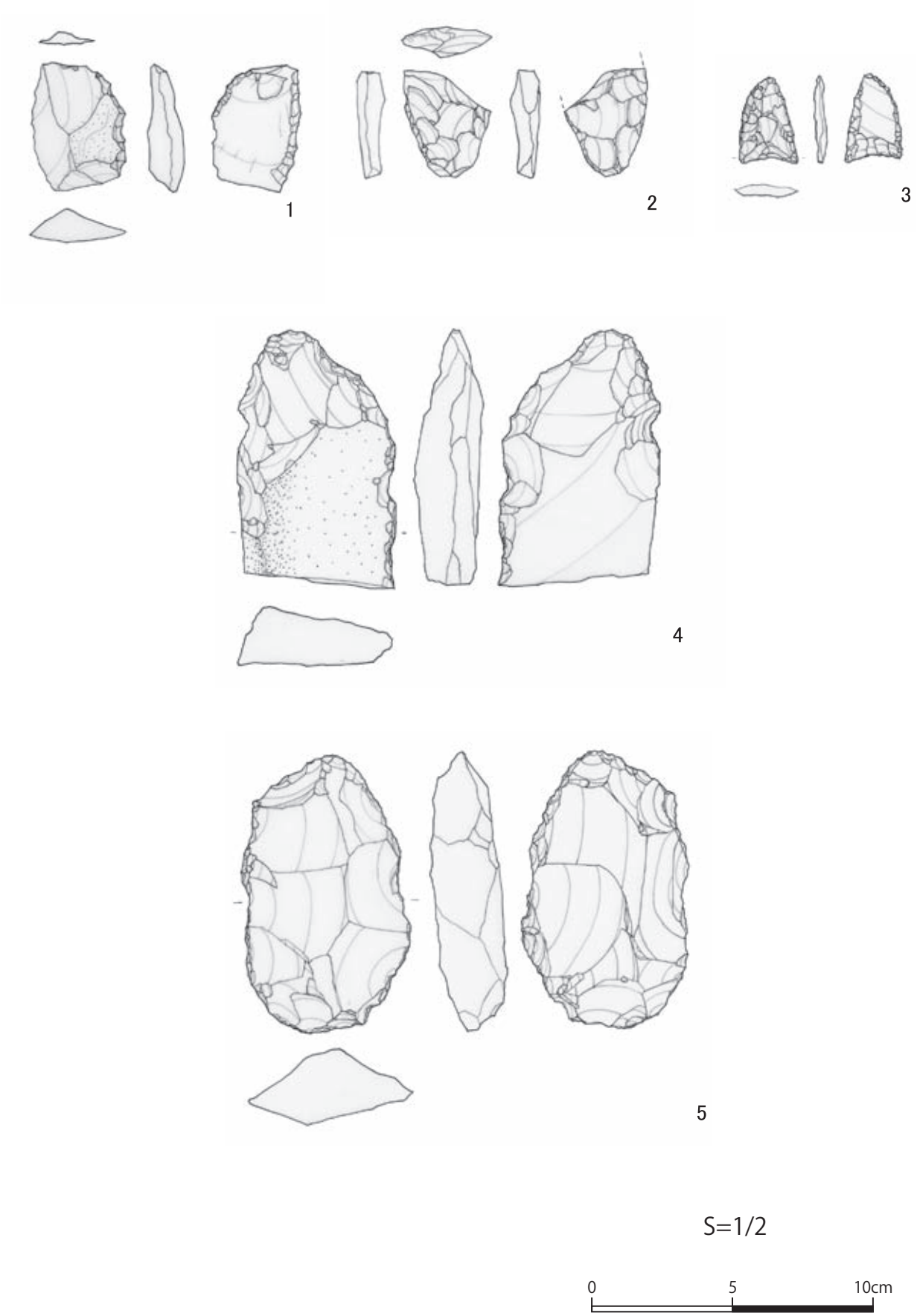
第 17 図 1 はⅢｃ層から出土したメノウ製の剥片を素材とした削器である。側縁部に短い規則的な二次加工が施されている。2はⅢｂ層から出土した頁岩製の両面加工の石槍基部である。ほぼ中央部で折れ、尖頭部を欠いている。3はⅦ層から出土した頁岩製の石鏃である。基部はやや内湾した凹基の石鏃である。腹面に素材剥片の剥離面を残している。4と5は同じくⅦ層から出土した頁岩製の両面加工石器である。4は、形態が半月状を呈し、一端を欠損している。背面には礫面を残しており、厚手の礫皮を残す剥片を素材として製作されたことがわかる。5は両面を比較的荒い加工で調整したもので、周縁の加工も部分的であり、未成品である可能性がある。特に3と4は、投棄されたイヌの遺体に伴って出土し、周辺に剥片とチップの集中区がみられた。



第15図　出土土器拓本図　その1



第16図　出土土器拓本図　その2



第17図　調査区出土石器

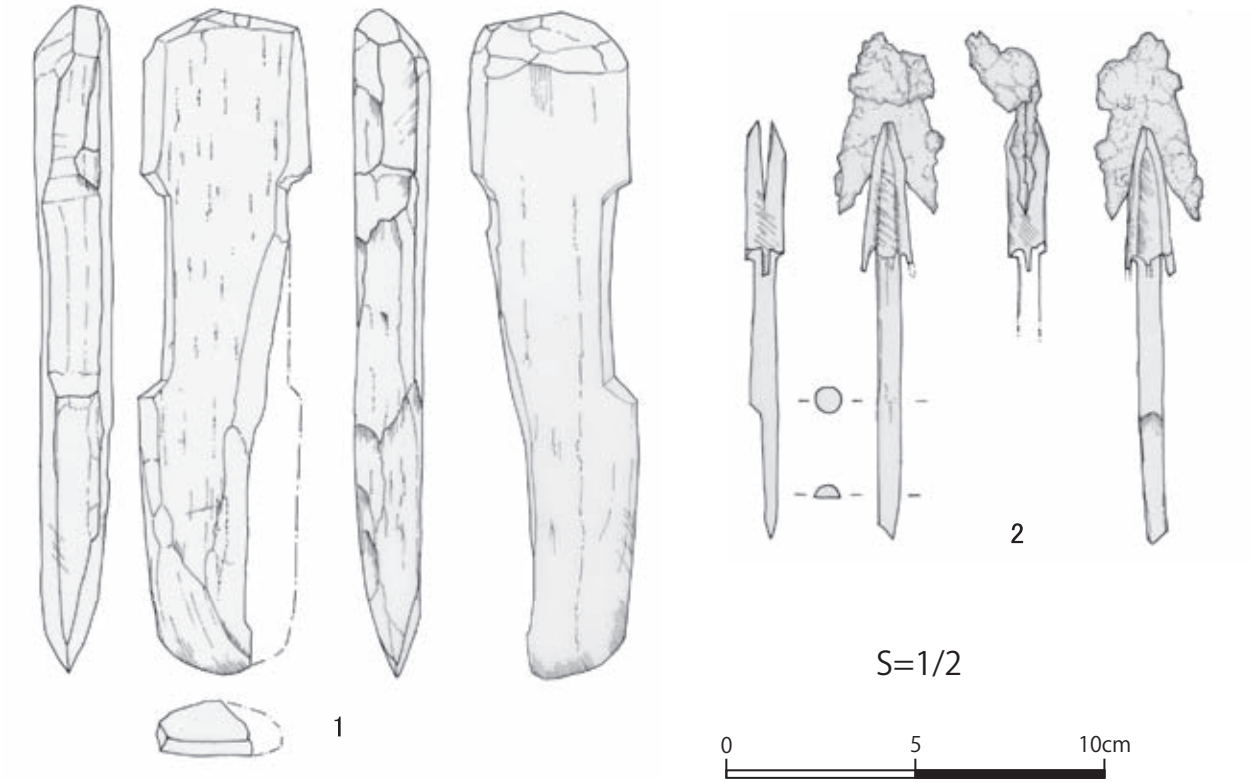
第４節　骨角器

骨角器類は、オホーツク文化期の魚骨層であるⅢ層中と、続縄文文化期の包含層であるⅦ層中から出土している。オホーツク文化期の骨角器としては、骨鏃や骨斧がみられ、これに加工痕をもつ海獣骨などが伴っている。貝層中に製品や未成品、骨角器の製作工程に関わる資料が魚骨やウニ殻、貝殻類、獣骨類、土器、石器とともに投棄されていることがわかる。魚骨や海獣骨とともに投棄されている条件も影響し、骨角器の遺存状態は良好である。

続縄文文化器の包含層は砂層であるが、魚骨や動物遺存体の残りは良好であり、出土した骨角器も遺存状態が良好である。Ⅶ層からは鯨骨に面取りを施した加工品が2点出土している。

１はⅢｂ層から出土した骨斧である。先端部分を一部欠損している。端部に面取痕がみられる。

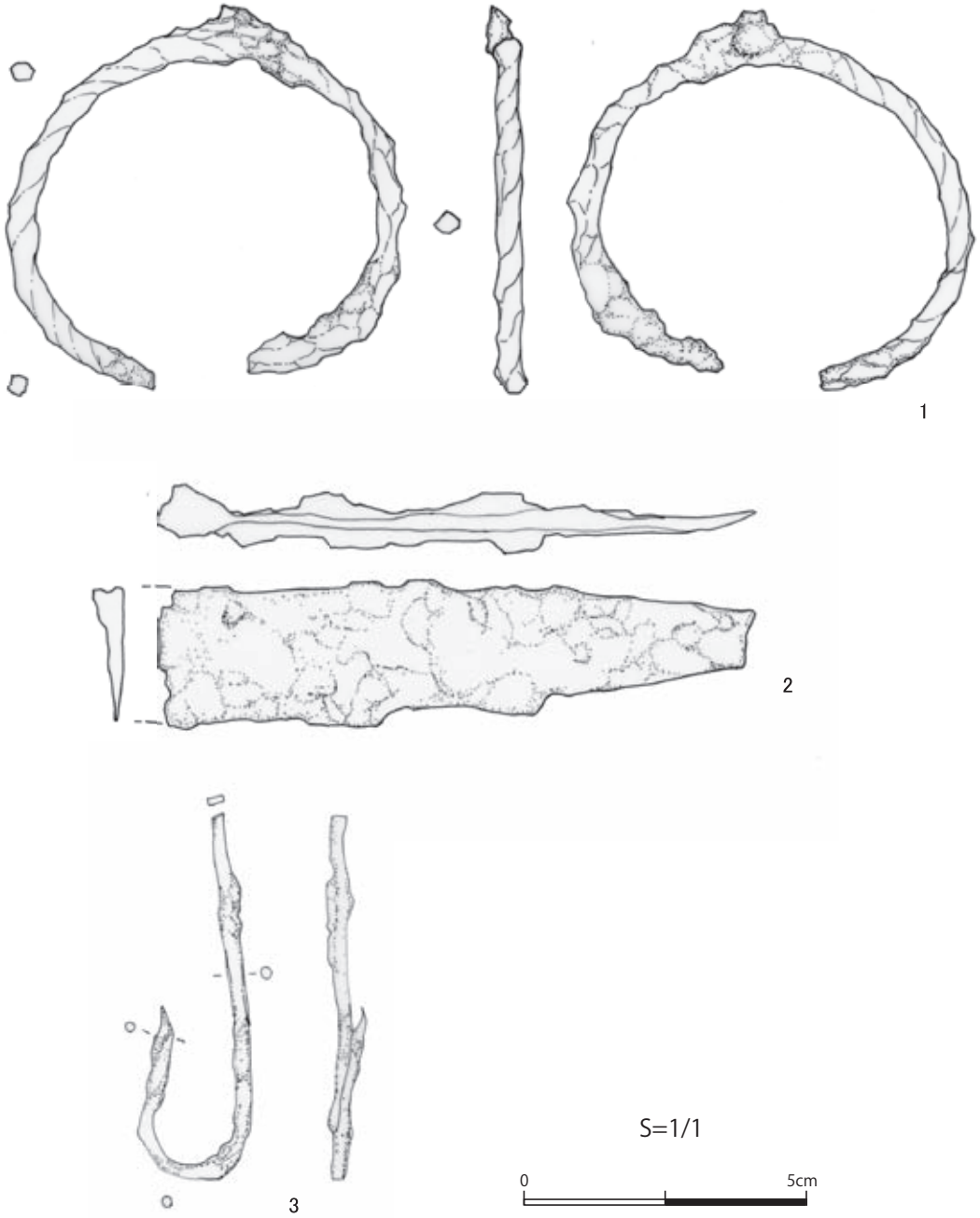
２はⅡ層の近世アイヌ期の送り場遺構から出土した鏃である。出土時は先端と中柄が折られて、別々に出土したものを接合し、復元したものである。柄の先端には、深いスリットが刻まれ、そこに鉄製の三角形の凹基の鉄族が刃部として挟み込まれている。金属製の鏃は意図的に折り曲げられている。鉄製鏃を装着した直下には、燕尾状の返しが四面にそれぞれ作り出されている。



第18図　調査区出土骨角器

第5節　金属製品

出土した金属器は、数少ない。本概報では、第2号墓の副葬品と想定される金属製品を提示する。それぞれ第2号墓の上部配石脇およにその下位で確認された遺体の脇から出土したものである。第3号墓は、明確な掘込みをもった墓壙が確認されていないため、副葬品としての判断は出土状況にもとづく。1は金属製の腕輪である。細い針金上の金属をねじり環状に作り出したものである。詳細な成分分析をおこなっていないため現段階では、錫を含むかどうかは不明である。2は鉄製の刀子である、柄部を欠損している。3は鉄製釣り針である。細い針金状の素材で製作されている。



第19図　調査区出土金属製品

第6章　まとめ

2013 年度の浜中2遺跡における調査では、2011 年度の調査で確認されていたオホーツク文化期の魚骨層と続縄文文化期の包含層に加えて、近世アイヌ期の遺構と包含層を確認することができた。また南側へ拡張した調査区において、オホーツク文化期の貝層の南限（山側の広がり）を確認することができた。浜中2遺跡の全体構造の解明が調査の大きな課題の一つであるが、オホーツク文化期の埋葬空間が比較的集中することは確認できたが、同時期の居住空間との関係はまだ未解明の部分が多い。2013 年度の調査成果をまとめると以下のようになる。

1．砂丘南部に近世アイヌ期の送り場や、アワビの小規模な貝層の広がりがあることが確認できた。
2．調査区東部の A03 区で確認された厚いオホーツク文化期魚骨層は、南側の A02 区においてはゆるやかに消滅し、包含層に移行することが明らかとなった。これによって浜中砂丘中央部の貝層の南限を把握することが可能となった。2011 年度の調査概報においても指摘したが、オホーツク文化期の魚骨層はラミナ状の堆積を呈し、小規模な投棄単位が複雑に累積している状況が明らかとなっている。
3．オホーツク文化期の埋葬事例としては、 2011 年度の新生児の墓が1基に加えて、2013 年度はオホーツク文化期終末期とオホーツク文化後半期の埋葬事例が2基新たに確認された。2011 年度と 2013 年度の二カ年の野外シーズンに確認された埋葬事例は計3基となる。
4．オホーツク文化期の魚骨層からは、イヌとカラフトブタの動物遺存体が数多く検出された。出土状態からまとめて投棄された個体と推定される。オホーツク文化期の家畜動物利用を復元する貴重な資料となる。
5．オホーツク文化期の魚骨層の下位には、無遺物層である砂層を間層としてはさみ、続縄文文化期の包含層であるⅦ層が確認された。この包含層においては、石囲い炉と周囲から石器製作址とイヌの動物遺存体が確認された。
6．A0 2区西壁において新たにコラムサンプルを採取し、分析中である。

出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターにおいて整理中であり、2011 年度の出土資料とあわせて、2013 年度末をめどに、二年間の調査成果を中間報告する予定である。中間報告には、現在琉球大学大学院医学研究科人体解剖学研究室で整理分析中である人類学資料、慶応義塾大学文学部民族考古学講座で整理中である動物遺存体、北海道大学大学院理学研究院遺伝的多様性研究室で分析中の家畜動物の古代 DNA 分析についてもあわせて報告する予定である。

2013年度
北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書

2014 年4月30日発行
編集発行　北海道大学アイヌ・先住民研究センター　加藤博文研究室
060-0808　札幌市北区北8条西6丁目
印刷・製本　北海道図書企画